

君は、政治家として輝かしい業績を残されました。政治の道を選んだことに、君は満足だったことだと思います。しかし、君が最初に選んだ外交の道に、君はなにがしかの郷愁を抱き続けていたのではないでしょうか。君が、外務省を戦後早くやめたにもかかわらず、多忙を極める政界にありながら、クラス会には必ず出席して、僕達との歓談を楽しみにしていたことは、その何よりの証拠です。また、冗談でしうが、よく「僕を大使にしらえんか」などと僕達を困らせたこともあります。

君は、また僕達クラスメートが勤務している外国で僕達に会うこと無上の楽しみとしていました。同期生は殆ど全部、君とそれぞれの任地での会合を楽しみました。

このように、君は、僕達にとってかけがえのない同期生なのです。その同期生も、今までに外務省のそれぞれの仕事を終わり、いわば第二の人生を送っています。しかし、君は現役で、これからもまだまだ政界で活躍し、そのような君をクラス会で迎えることを楽しみにしていたのに、その楽しみも、一瞬にして消え去りました。

「人生古より誰か死なからん」という天文祥のことばは、われわれに、生死の問題だけにとらわれてはならないことを教えてくれます。「生」の中身が問題だということです。君は、七十年の人生をひたすら国事のために燃え尽くしました。この七十年の人生は、中身の極めて充実した人生だったことだと思います。このことに、君は、何の悔いもないはずです。

## 第二章 「まじめ少年」の青春

### 森山欽司の誕生

森山欽司は大正六年一月十日、現在の東京都千代田区麹町で、弁護士・森山邦雄の長男として生まれた。兄弟は二人。弟の雅司は森山が昭和二十一年に政治の世界へ飛び込んで以来、その政治生活を常に裏から支え続けた。

その雅司は兄・欽司に先がけることわずか一ヵ月余の六十二年三月二十八日に肝不全のためこの世を去了。雅司は森山の蔭となり、四十年間にわたって縁の下の力持ちをつとめてきた。この書をまとめるに当たって森山の多彩な足跡をたどる際、膨大、克明な資料を提供してくれたのも雅司である。

雅司は大正九年五月二十八日生まれ。森山とは三歳半、学年にして四年違いである。麹町小学校、府立第一中学校までは森山と同じルートを歩んだが、その後慶應の予科に進み、在学中、予備学生

として学徒出陣。ゼロ戦の操縦士として特攻隊に編入されたが、敗戦によつて命びろいをした。

戦後、政界へ進出した森山のため雅司はつねに選挙運動の第一線を駆け巡り、昭和二十七年に森山陣営が選挙違反を起こした時には長く拘禁された。

だがその一方で雅司は戦後石川島芝浦タービンに入社。間もなく栃木県出身の財界人・菊池寛実のもとに移り、京葉ガスや大阪製紙の建直しに力を發揮した。その後独立し千代田株式会社などを経営、実業人としても立派な足跡を残している。

森山は日頃から雅司について「私の政治姿勢の最大の理解者」と評していた。十年ほど前から体調を崩し、三年前に大手術をしてからは家に引き籠もりがちだった雅司は昭和六十二年三月初め体の不調を訴えて入院し、一ヶ月足らずで世を去った。享年六十六歳だった。

その雅司の告別式が行われた四月十八日、森山はあいさつの中でこう語っている。

「兄の私は武骨でバンカラ、大学を卒業するまで詰め襟の学生服しか着たことがありませんでした。が、雅司はハイカラでスマートで、慶應予科に入ると同時に、お袋を籠絡して背広を着込んでいました。彼は終生、本当に兄貴思いの良い弟であります。……兄の私は政治家として堅物を通してきましたが、弟は実業人として現実的であり、また人当りも良く、皆さんに可愛がられました。多くの人に愛され、頼りにされ、どなたとも長くお付合いをして戴いて、幸せな奴であったと思います。

今日では六十六歳という年は早死であります。また弟が先に死んだということは私にとつて大変

にショックングなことでありまして、日増しに寂しい思いがつのって参ります」

終生仲が良く「二人三脚」で歩み続けた二人は、順序を少し狂わせただけで、あいついで他界していった。

### 努力家でまじめ人間

大正十二年、森山は地元の麹町小学校に入学する。このころの自分について、森山はそれほど強い印象を持つていない。

「子供の頃、まあ、成績はいいほうでした。小学校を卒業するときは総代で、答辞を読んだな」弟の雅司によると、

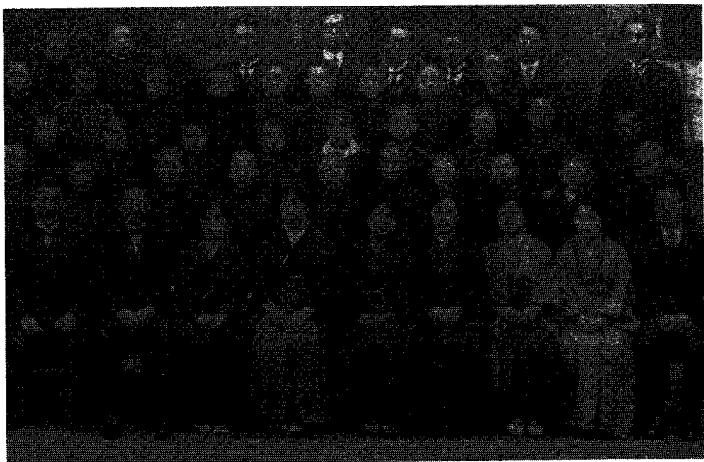
「彼はひとことでいうと努力家、たいへんな努力家でしたね。弟の私の目から見ても感心するほどでした。中学は府立一中（現・日比谷高校）に入ったのですが、小学校の低学年のころは、あまり



弟の森山雅司（右）と（昭和52年10月）。

右の写真は片瀬海岸にて。欽司8歳、雅司5歳（大正13年8月）。





東京・麹町小学校卒業記念写真。白衿の少年が森山(昭和5年3月)。

目立つような成績じゃなかったのです。ところが四年生ぐらいからコツコツと勉強をはじめまして、五年生、六年生となるにしたがって、グングン頭角をあらわしてきて、結局当時でも難関といわれていた府立一中に合格するわけです。とにかく、まじめ人間でしたね。生活態度にしても非常にきちんとしていて、脱線するようなことはありませんでした。僕の記憶では兄弟喧嘩などもほとんどしたこと�이ありません。ただ、その後彼は静岡高校へ行き、僕は府立一中から慶應に進んだのですが、官学と私学について論争したなんてことはありました。彼はどちらかというと「官学にあらずんば学校にあらず」といった立場でね

まじめ、努力家、勉強家、森山を形容するにはこれがピタリと当てはまる。

森山については、子供のころから終始一貫、同じ姿勢で一直線に人生を生きてきたというひたむきさを感じると誰もがいうが、雅司の言葉もそれを裏付けている。

「まじめ少年」森山は、麹町小学校を卒業し、府立一中に進む。中学校時代の成績は本人の弁によると「普通よりちょっとよかつた」らしい。森山は決してガリ勉タイプの少年ではなかつた。

中学に進んだ森山は柔道部に所属し、まじめに取り組んで、卒業するまでに初段をとつた。一人息子の太郎はのちに森山と同じく高校で柔道部に所属したが、試合中のアクシデントで惜しくも一命をおとした、不思議な因縁を感じる。

府立一中を卒業した森山は、旧制の静岡高等学校へ進学した。森山にとって静岡の地は縁もゆかりもない所だったが、ここを選んだ理由を森山はこう述べた。

「いや、一高を受けてもし落ちたら一年間は浪人生活をしなくてはいけないでしょ。それが嫌でね。静岡高校なら受かると思ったから受けただけ。それ以外にはなんの理由もありませんよ」

この静岡高校での三年間の生活は森山の人格形成に大きな影響を与えた。

「とにかく、静岡には一人も知り合いがいませんでしたから、三年間ずっと寮に入っていました。寮は別に強制ではなかったから、入学したばかりのときは百人ぐらい入寮しましたが、どんどん減つていって卒業まで寮で生活していたのは十人か十一人だったな。この寮では後輩に中曾根君(中曾根康弘前首相)がいましたね。彼の従兄弟が僕と同期でしたな」

はじめて親元を離れ、一人の知人もいない土地での生活に飛び込んだ森山。だがこの三年間の高校生活を、森山はかなりエンジョイしたようだ。



静岡高等学校寮委員会。前列左端が森山、右端が中曾根康弘氏

この当時の話になると、彼の表情には懐しさがあふれていた。森山は静岡高校に入学すると山岳部へ入部した。

「高等学校というのは決して勉強ばかりやることじゃないのです。むしろ勉強以外のこと、たとえばクラブ活動や哲学論議、社会勉強なんかに熱中することのほうが大切なんですね。静岡高校には山野跋涉を中心とする登山クラブもありましたが、やはりアルピニズムにもとづいた登山をやらなければだめだと考えて、山岳部でがんばったのです。

静岡というところは雪もほとんど降らないし、気候も温暖です。したがってスキーは不得手だし、岩場もない。だけどアルピニズムの精神、つまり雪が降ろうが、岩場がどんなに険しかろうが、あらゆる方向から山頂をきわめるという気持でやりましたよ。静岡からだと甲府が近いから南アルプスにはよく行きました。南アルプスの高峰はほとんど登つたんじゃないかな。当時、立教大学がナンダコットという山の登攀に成功して、日本はエクスペディション、いわゆる遠征時代に入っていました。僕たちも将来の海外登攀を夢に描いていましたねえ。もつとも僕はその後、登る機会もなかつたし、いろいろな意味で山の“麗”のほうばかり歩いていますけど。この山岳部での生活を通じて、あらゆる困難を乗り越えて目標に到達するというアルピニズムの精神を身につけたし、切磋琢磨の中で自分なりの世界観が形成されたと思います。その意味で、山岳部生活は一生の思い出として残りましたね」

森山たち静岡高校山岳部OBは、「紫岳会」というOB会を組織し、現在でも時折、旧交を温めて

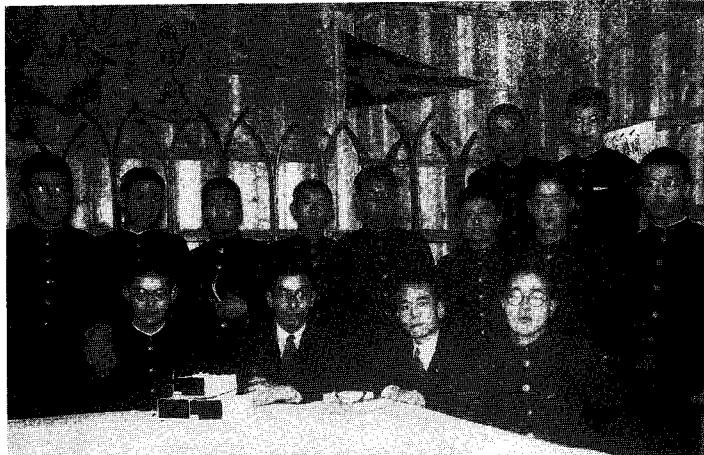
いるという。

森山は静岡高校で桜井和市教授と出会った。

「桜井先生は僕が山岳部にいたときの山岳部長で、生徒主事で、おまけにドイツ語の先生でもあったのです。人間的にも非常に素晴らしい方ですね。卒業後もずっとおつき合いさせてもらいましたし、とにかく僕にとっては、まったく頭のあがらない方でした」

桜井は静岡高校の教授から戦後、学習院大学の教授となり、のちに学習院院長に就任したが、六年一月十二日死去した。  
恩師・桜井の葬儀に参列した森山はつぎのよう  
な弔辞を獻げている。

「私は昭和九年から十一年まで支那事変が始まる直前の三年間を、旧制静岡高等学校で過しました。すでに半世紀の昔であります。当時、先生は、静岡でドイツ語を教えておられる新進氣鋭の青年教



静岡高等学校山岳部の会。前列右端が森山。その隣が桜井教授。

授で、教室でたいへん厳しかったばかりでなく、生徒主事としてもにらみをきかす、こわい先生であります。しかし、からりとした爽やかなお人柄で、生徒たちに慕われており、人気がありました。

先生は私にとって青春時代を過した静高のシンボルであり、人生の節目節目で欠くことのできない師でありました。

恩師・桜井教授は初当選を果たした独身の青年代議士・森山に、当時まだ東大の学生だった才媛の女子学生を引き合わせた“縁結びの神”でもあります。この女子学生が森山夫人の眞弓であることはいうまでもない。

地のさざめごと秘めやかに  
安倍の川瀬の奏れば  
芙蓉の峰は厳かに  
天の黙示をもらすなり  
ゆかしの陵や静陵は  
高き望みを富士ばらの  
匂いにこめて集ひ来し  
我等が館そびゆなり」

最後に、昔、蛮声を張りあげて先生と一緒に歌つた静高の代表寮歌「地のさざめごと」の冒頭の一節を朗読して、先生の御靈にたむけたいと思います。



旧制静岡高等学校山岳部の仲間と。

自我に目覚める年代の旧制高校時代、人間同士のふれあいぶつかり合いによって培われたものの考え方、すでに一個の世界観の土台を形成するものであります。その人生で最も大事な時期に桜井和市先生にめぐりあつたことは私にとり、この上ない幸せがありました。

自分に目覚める年代の旧制高校時代、人間同士のふれあいぶつかり合いによって培われたものの考え方、すでに一個の世界観の土台を形成するものであります。その人生で最も大事な時期に桜井和市先生にめぐりあつたことは私にとり、この上ない幸せがありました。

自分に目覚める年代の旧制高校時代、人間同士のふれあいぶつかり合いによって培われたものの考え方、すでに一個の世界観の土台を形成するものであります。その人生で最も大事な時期に桜井和市先生にめぐりあつたことは私にとり、この上ない幸せがありました。



東京帝國大学の学生時代。

「静高は旧制高校でもリベラルなほうでした。パンカラな気風もあった。そのへんが東京高校や武藏高校などとは違う。強いていえば浦和高校あたりと似ていたかもしません」（森山）といった校風の中で森山は三年間の高校生活を過ごした。

森山の葬儀に際し、総理大臣であった中曾根康弘は、その弔辞のなかで、次のように述べている。

「貴方は旧制静岡高等学校に於いて私の一年先輩に当たられ、同じ寮に相共に起居し、後輩である私に何くれとなく温かいご指導をいただきました。常に山を愛し、山岳部の指導者として活躍された山男でした。山男は孤独の中で常に自分と戦いながらより高きを求めつづけます。国木田独歩は『山林に自由存す』と言いましたが、山男としての森山さんの姿勢、貴方の哲学的な求道者としての道は、そのまま政治家としての道でもあったようです。その政治生活も自己の信ずるところに従つて貫き通され、清潔で誠実な政治家として理非曲直を明らかにすることに憚ることなく常に堂々の論陣を張り、ステーツマンとしての本領を發揮されました。」

静岡高校を卒業した森山は、東大法学部へ進む。進学率の低い時代だったとはいえ、当時もいまも東大法学部が最難関であることに変わりはない。山岳部に所属し、勉強以外の面で青春を謳歌していたとはいっても、そこは基本的に『まじめ人間』の森山のこと、『本業』をおろそかにするわけもなかつた。

#### 外務省から軍需省へ

日本が太平洋戦争に突入する直前の昭和十六年十月、森山は高等文官試験（いわゆる高文）の外交と行政を受験し、その両方に合格。結局、森山は同年十二月、繰り上げ卒業と同時に外務省に入省した。

#### 外務省入りの動機は、

「普通、外交官になる人は、父親が外交官だつたりして、子供のころから外交官になることを目指していたような人が多いのですが、僕の場合はたまたま外交官試験と行政官試験の両方に受かったので、外交官のほうを選んだだけのことなのです。当時の日本がいまとは違った意味で国際的に伸びていた時代でしたから、世界を手の平の上に乗せるような仕事をしたいと思ったのが理由といえば理由でしょうかね。そういうね、僕はのちに運輸大臣になつたわけですが、このとき行政のほうも合格したので、運輸省の前身・鉄道省やその他一二、三の役所からも、ぜひうちに来い。海外へ行く機会もあるから』なんて誘われたことを覚えてますよ」

森山の外務省入省の動機については、こんな見方をするものもある。森山のいとこで前市市議会議員の駒場明房によれば、

「欽司さんが東大的学生だった頃、二人の学友を紹介されたことがあります。一人はのちに大蔵省

に入りましたが戦死されたようです。そしてもう一人が戦前の政友会の重鎮だった前田米蔵さんの次男（前田嘉明現鳴門教育大学長）で、この人の存在が代議士のその後の方向を決めることになったようですね。

欽司さんは前田さんと小学校から同級生で、前田家に出入りするうち、前田さんの政治に対しても金権体質が強すぎるという批判を持つようになり、私に対しても「俺は必ず政治家になつて清廉で健全な政治をつくつていくんだ」と話していました。そのためにはまず西欧の先進国を見てくる必要があるということで外務省入りしたようです。残念ながらドイツ大使館赴任の辞令は空文になり、軍隊生活に入つてしましましたが

不思議なのは、森山はなぜ父が弁護士であつたにもかかわらず、高文試験のうち、外交と行政を受け、司法だけを受けなかつたかという点である。

「親父が弁護士だったからこそ、敢えて避けたのですよ。よくあるでしょう。子供が親父の仕事を嫌うケースが。さすがに親父は失望していましたね。でも、あとになつて考えてみれば、弁護士になつておけばよかつたよ。ほかの資格は、いざという時なんの役にも立ちませんから」

だが、「世界をこの手に」の希望に燃えて入省した外務省での生活は何か月も続かなかつた。応召である。

森山は本籍地である栃木県宇都宮に置かれていた陸軍第五十九連隊・東部三十六部隊に二等兵として入隊する。新兵としての訓練を受けたのち、上官のすすめなどもあつて、經理部幹部候補生の

試験を受ける。宇都宮の師団で一番の成績をとつた森山は、東京・小平市にあつた陸軍經理学校に入学した。

入隊当時の上官でのちに政治家・森山の熱烈な支持者となる松本節（元宇都宮管内タバコ耕作組合長）は「森山一等兵」についてこう語る。

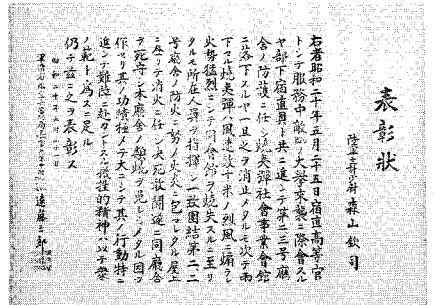
「当時僕は、三十六部隊の内務班長でした。入隊前に森山先生の身上明細書がまわってきたのを見た、これはえらい人が入つてくるなと思いました。東大の法科を出て高等文官試験にもパスしてたのですから。最高の人だと思い、粗末にはできないし、かといって甘やかしてもいかんなという



陸軍少尉として軍需省勤務の頃。  
愛犬のエアデルテリア「ピント」と。

表彰状

陸軍高等森山鉄司



消防活動にたいする表彰状。

感じでした。入隊してきた時は先生としても大いに緊張されていたようです。鉄砲かつぎはあまり得意ではありませんでしたね。第一期の検閲が終り、経理部幹部候補生の試験を受けたのですが、その時先生は真価を發揮され、師団中、断然の一番でパスしました。“これはたいした男だな”と思い、ますます先生の偉さを再確認しましたよ。

この頃の先生を見ていて、まさか政治家になられるとは思つていませんでした。いずれは外交官として活躍されるだろ

うと思ひ込んでいました】

経理学校を優秀な成績で卒業した森山がまず配属されたのは陸軍航空本部だった。

「経理学校を卒業するとき、それぞれの配属が決まるわけです。原隊へ復帰する人も少なくないのですが、僕は名前を呼ばれない。どこへいかれるのかと思っていると、配属先は陸軍航空本部。当然経理部だと思ったら、整備部だったのです。やがて、陸軍と海軍とが資材などを奪い合うついた無駄な競争をはじめたために、軍需省航空兵器総局ができ、そこへ見習い士官でいって、まもなく少尉になり、終戦までを過ごしたのです」

その間、昭和二十年五月二十五日首都大空襲のあった日、当直将校だった森山は庁舎の防火活動

に大活躍をし、軍需省航空兵器総局長官遠藤三郎陸軍中将から表彰状を受けた。

軍需省での終戦処理を終えた森山は外務省に復帰したのも束の間、政治の世界へ飛び込んでいく。